岡山市立オリエント美術館特別講演会

若手研究者が挑むセム系部族社会の形成

－ユーフラテス河中流域の青銅器時代考古学－

発表要旨集

2010（平成 22）年 6 月 12 日（土）

主催
岡山市立オリエント美術館

協賛
文部科学省科学研究費補助金平成 17 ～ 21 年度特定領域研究
『セム系部族社会の形成　ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究』

岡山市立オリエント美術館特別講演会

『若手研究者が挑むセム系部族社会の形成』の開催にあたって

2005年度から2009年度にかけて、西アジア地域をフィールドとする日本の研究者の総力を挙げて取り組んだ、大型研究プロジェクト『セム系部族社会の形成　ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究』が行われました。このプロジェクトは、昨今の中東情勢を読み解く上で重要なキーワードとなっている同地域特有の「部族社会」が形成された経緯やその特質を、あらゆる分野から総合的に解明しようとしたものです。5年間の研究成果は、随時シンポジウムやさまざまな出版物によって公開されてきました。ただ、ここ岡山においては残念ながら研究会等の催しは行われませんでした。そこでこの成果を岡山の皆様にも紹介したいと、プロジェクトの代表者である国士舘大学の大沼克彦教授に相談したところ、即座に賛同いただきました。このプロジェクトは考古学、楔形文献、動植物、古環境、年代測定、形質人類学、文化人類学などの諸分野からなる総合研究プロジェクトです。今回の特別講演会は、同プロジェクトを牽引してきた若手研究者を迎え、特に考古学分野での成果を紹介いただきます。セム系部族社会が歴史に現れるその最初のころに遡った研究です。

同プロジェクトは所定の研究期間を終えました。大きな成果を挙げたと同時に、今後さらなる発展が期待されるテーマも見いだされました。この特別講演会をきっかけに、今後の展開にも注目いただければ幸いです。

主催者

プログラム

13：00　趣旨説明
　　須藤　　寛史（岡山市立オリエント美術館主任学芸員）
13：10　集落から見るセム系部族社会－テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡を中心に－
　　長谷川　敦章
14：00　墓から迫るセム系部族社会の形成
　　久米正吾
14：40　休憩
14：50　セム系部族社会の景観をさぐる－テル・ガーネム・アル＝アリ周辺の遺跡踏査－
　　門脇　誠二
15：30　休憩
15：35　座談会：遊牧と農耕のはざま－セム系部族社会の構造に挑む－
16：30　閉会

岡山市立オリエント美術館特別講演会要旨集

若手研究者が挑むセム系部族社会の形成
－ユーフラテス河中流域の青銅器時代考古学－

目　　次

岡山市立オリエント美術館特別講演会
『若手研究者が挑むセム系部族社会の形成』の開催にあたって …… 1

セム系部族社会プロジェクトの概要 …… 3

集落遺跡からみるセム系部族社会
－テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡を中心に …… 長谷川敦章　7

墓から迫るセム系部族社会の形成 …… 久米　正吾　13

セム系部族社会の景観をさぐる
－テル・ガーネム・アル＝アリ周辺の遺跡踏査 …… 門脇　誠二　19

座談会 遊牧と農耕のはざま－セム系部族社会の構造に挑む－ …… 25

「セム系部族社会の形成」プロジェクトの概要

シリア・アラブ共和国の北東部、ユーフラテス河中流域に位置するビシュリ山系は、初期王朝時代からセム系のアムル人の故地として粘土板文書に記載され、注目されてきました。このビシュリ山系をフィールドに、遊牧部族社会の流入と離脱を繰り返しながら常に共存してきた中東都市社会固有の歴史的特性を通時的に解明し、「セム系部族社会」が形成された経緯を明らかにする総合的研究プロジェクトが 2005 年度から 2009 年度まで行われました（領域代表者：国士舘大学イラク古代文化研究所教授　大沼克彦）。

このプロジェクトでは、自然、人文両科学における多様な分野の連携を通じ、「部族性」をキーワードにした総合的な研究を行っています。研究の目的は、中心となる集落遺跡の調査・研究による通時的な文化変遷の把握、および関連周辺遺跡の調査・研究を行い、両者の成果の比較から周辺遊牧社会と定住都市・農村社会との関係を明らかにすることです。また同時に自然環境の問題、粘土板文書に記述された歴史的背景も踏まえ総合的に検討しています。特に考古学的研究手法を用いた現地調査は、ユーフラテス河の河川低地に位置するテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺とケルン墓群が広がるビシュリ山系北麓の２つの地域を中心に行っています（図１、図２）。いずれもシリアと日本の共同調査として行われています。これらの調査で得られた一次資料をもとに、理化学的分析手法も取り入れながら，「セム系部族社会」の形成を明らかにすることを目的としています。本講演では、前者のテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査、その近郊墓域であるワディ・シャッブート及びワディ・ダバ墓地遺跡の発掘調査、そして、発掘調査をしているこれらの遺跡の周辺地域における踏査の成果をもとにユーフラテス河中流域における青銅器時代の「定住民」と「遊牧民」の実態に迫ります。

プロジェクトの詳細は、文部科学省科学研究費補助金　平成 17 年度発足特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」のホームページ（http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/）をご覧ください。

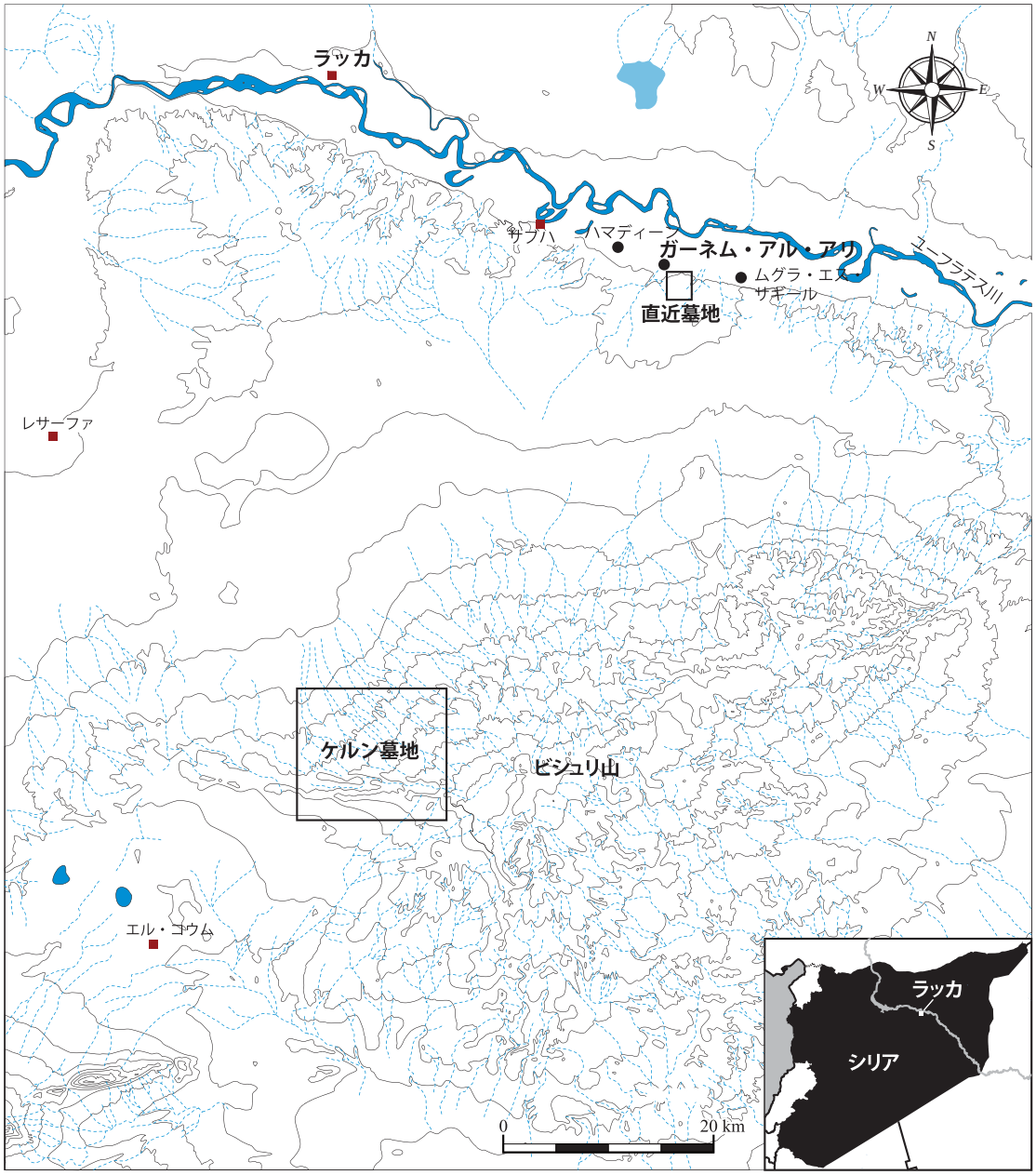

図１　調査地の位置（原図は東京大学西秋研究室提供）

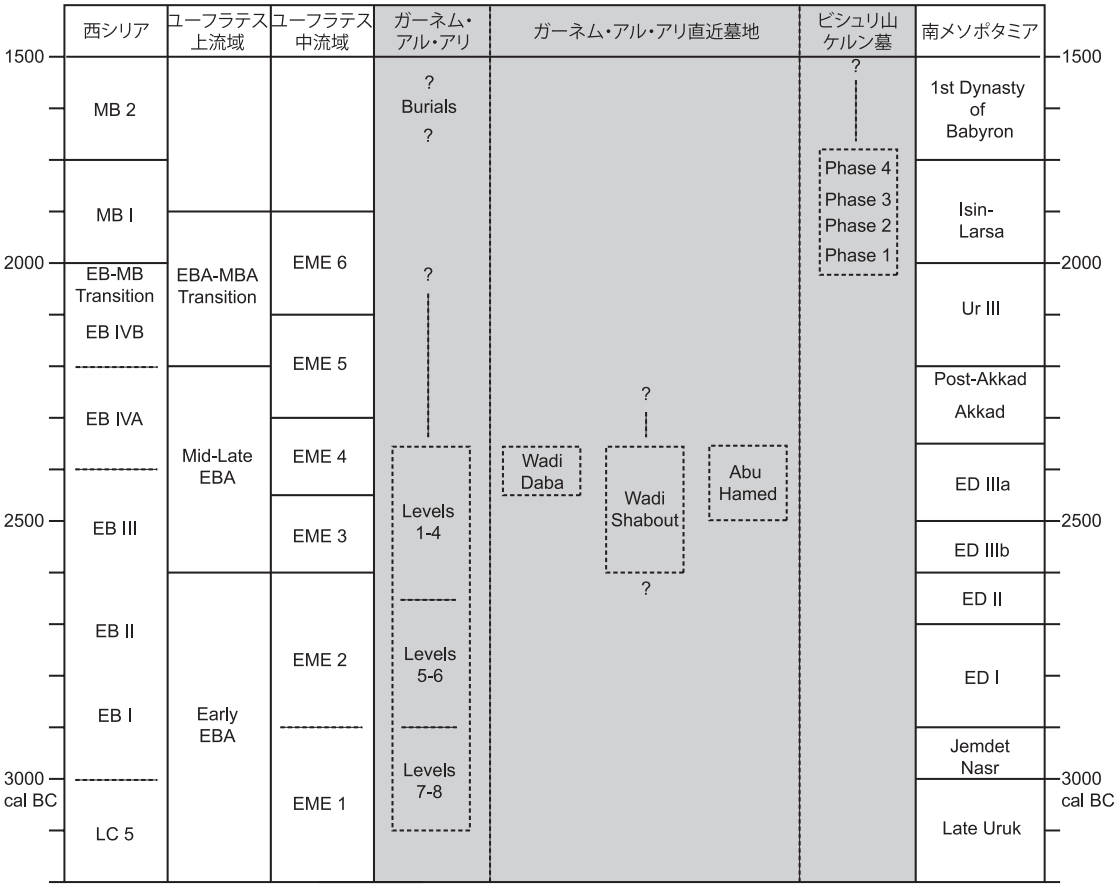

図２　前期青銅器時代～中期青銅器時代の編年
ＥＢ（Ａ）＝Early Bronze (Age)、前期青銅器時代
ＭＢ＝Middle Bronze (Age)、中期青銅器時代
ＥＭＥ＝Early Middle Euphrates、前期ユーフラテス中流域
ＥＤ＝Early Dynasty、初期王朝時代

メ　モ

集落遺跡からみるセム系部族社会
－テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡を中心に－

長谷川　敦章
日本学術振興会・特別研究員 PD

１．ユーラテス河中流域の集落遺跡

トルコを源にイラクへと流れるユーフラテス河は、シリアの北東部で大きく湾曲して東西方向へ流路を変えます。このユーフラテス河中流域、そしてその南に横たわるビシュリ山周辺をフィールドに「セム系部族社会」の形成を探るプロジェクトが行われてきました。当時の社会を探るためには、人々の生活の基盤となる集落を調査することが欠かせません。そこで、このプロジェクトでは、青銅器時代の集落遺跡であるテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査を 2007 年から 2009 年にかけて、合計 6 回行いました。

ユーフラテス河中流域のバリーフ川が合流する地点付近には、現代シリアの主要都市の一つであるラッカがあり、発掘隊もこの街を拠点に調査をしています。ラッカにはアレッポからデリゾールへ向かう主要幹線道路が、ユーフラテス河に沿うように伸びています。この幹線道路をラッカから東へ 50km ほど進むと、道の北側になだらかに隆起している丘が見えてきます。この丘がテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡です。西アジアの集落遺跡の多くは、現在では丘になっているため、アラビア語で丘を表す「テル」と呼ばれます。

ユーフラテス河中流域の河川低地では、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡と同様な規模のテル型遺跡がいくつか報告されています（Kohlmeyer 1984）。しかし、これまで本格的な発掘調査は行われていませんでした。そこで、今回の調査では、集落の構造とそれが営まれた時期を明らかにすることを目的に調査を行いました。

２．テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡とは？

発掘調査を開始する前段階として、遺跡の形状、規模などの特徴を把握するために、詳細な測量調査を行いました。その結果、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡は、南北約 250m、東西約 290m のいびつな卵形をしていることがわかりました（図 1）。周りの畑からだと、10m ほど高くなっています。また、遺跡の西側が大きく削られ、南側には工場が建設されて、遺跡の形状が大きく変わってされていることも明らかになりました。1960 年代に農地整備のために作成された地形図をみると削られる前の、遺跡の形状がよくわかります。この地図から、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡は、南北約 450m、東西約 380m と今より南に大きく張り出した三角形をしていることがわかります。このことからテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の面積は約 12ha になると推定できます。

遺跡の現在の地表面の大部分は、遺跡近郊の村人達の墓地となっており、多くの墓石が並んで

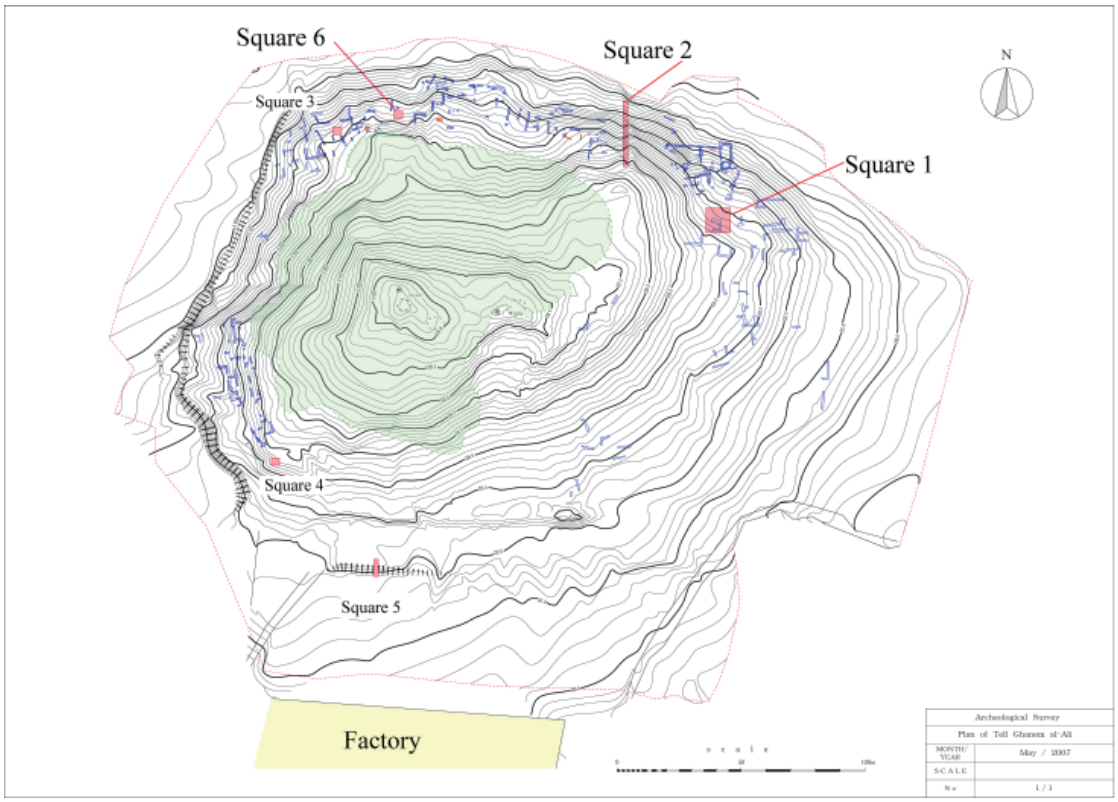

図１　テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の測量図

います。しかし、部分的に、現代のものではない石が露出していることに気がつきました。これらの石は、直線やＬ字、コの字形に並んでおり、埋没している遺構の一部であることが予想されました。

３．３つの主な発掘区

測量調査の結果を踏まえて、地表面で観察できた建築遺構の時期と構造を解明するために、遺跡北東斜面に第１発掘区を設けました。また、集落の形成と廃棄の時代及びその変遷を確認するために、遺跡北側斜面に南北に長い第２発掘区を設けました。このほかも遺跡の各地点に小さな試掘抗を設定し調査を行いました。ここではその一部を紹介したいと思います。

第１発掘区は、コの字状に露出していた石列を含んで、10m × 10m の大きさで設定しました。発掘の結果、このコの字の石列は、青銅器時代の住居の壁であることが明らかとなりました。石膏岩を積み上げて壁にしていたようです。第１発掘区からは複数の住居址が検出されましたが、以下の３つの特徴が確認できました。（１）住居址は、細かな立て替えが行われており、部屋の拡張や縮小が行われた際、もとの壁の一部が再利用された。（２）明確な床面が確認できない。（３)壁には主に石膏岩が使用されているが､部分的に日干し煉瓦を使用している。という３点です。

第３発掘区は、遺跡北西部に設けた３ｍ × ３ｍの試掘区です。遺跡北西部の地表面では、比

較的大きな石を使用した石列が観察されており、第１発掘区周辺とは少し違う様子でした。第３発掘区は規模が小さいため、遺構の大きさや間取りはわかりませんでした。しかし、第１発掘区の住居址とは異なり、プラスターによるしっかりとした床が確認できたことは、ひとつの成果でした。

遺跡の基本的な層位を確認するための第２発掘区では、８つの建築層を発見することができました（図２）。これら８つの建築層は、遺構の特徴から大きく３つの時期に分類することができます。最も新しい第３期は、石膏岩を使用した石壁でできた住居址です。ほぼ南北に軸をもつこれらの遺構は、第１発掘区で検出された住居址とほぼ同じ特徴をもっています。第２期は、これまでの住居址とは異なり大きな住居址が確認されました。第３期と同じく石膏岩を使用しているのですが、より大きな岩を使っています。また、平たい石を選択的に使用している点も、特徴的です。遺構の大きさ、建築材の違いが、第３期とは大きく異なります。最も古い第１期の最大の特徴は、住居が日干し煉瓦でできていることです。第３、２期の住居は、主に石膏岩でできており、一部に日干し煉瓦が使用されていましたが、第１期の住居址には、石膏岩の使用は全く認められませんでした。第１期より古い住居は確認できず、さらに下層で地山に到達しました。

図２　第２発掘区遠景（北から）

最後に第６発掘区を紹介したいと思います。遺跡の表面観察では、北西斜面に土壙墓が確認されたため、第６発掘区を設けて調査しました。発掘の結果、この土壙墓の被葬者は、頭を南西に向け、膝を抱いて体を丸めた屈葬であることが明らかになりました。また副葬品には、小型の壺や鉢形土器が見つかりました。

４．さまざまな発掘品

考古学において重要な遺物のひとつに土器があります。それは、土器が時代を示す物差しの役割を担うからです。第２発掘区の調査では、層位と遺構の検討から、３つの時期が明らかになりました。第３期から出土する土器の多くは、Plain Simple Ware と呼ばれる無文土器です。また、ユーフラテス精製土器と呼ばれる薄手で横位の彩文が施されている土器もわずかに出土しています。これらの土器から第２発掘区の第３期は前期青銅器時代 III 後半から IV 期の間であることがわかります。つづく第２期の土器にはユーフラテス精製土器はみられず、ほぼ全てが Plain Simple Ware となります。第１期では出土する土器の様子が変わります。こ

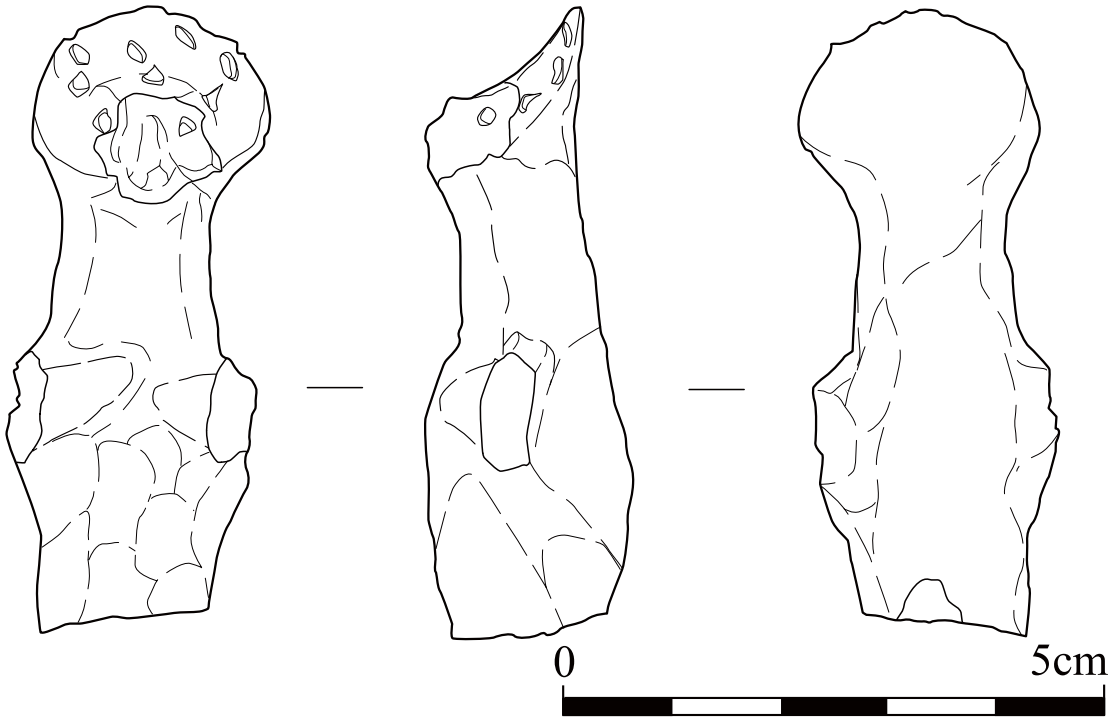

図３　テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の土偶

こでは無文土器に加えて、竹管文や爪形文が施された土器が出土します。遺構と同じく土器にも、第１期と第２期の間に画期がみられます。竹管文や爪形文が施された土器は類例が少なく、位置づけが難しいのですが、放射性炭素年代測定の結果も踏まえると、前期青銅器時代の初期段階である可能性が高いようです。

次に、第６発掘区の土壙墓から出土した土器は、形態的特徴から中期青銅器時代のものであると思われます。住居址からは前期青銅器時代の土器が出土していたことを考慮すると、集落変遷を考える上で重要な資料です。

土器以外で注目したい遺物の一つに、人物形土製品があります。テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡からはいくつかの人物形土製品が見つかっています。その多くは前期青銅器時代にユーフラテス河流域において一般的にみられるものなのです。しかしその中に特徴的な形状をした人物形土製品が確認されました（図３）。それは、ユーフラテス河流域の遺跡ではほとんど知られていないタイプのものなのですが、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊の墓地遺跡アブ・ハマドで同様の土偶が報告されています（Falb et. al. 2005）。これは、遺跡近郊の墓地遺跡群（本資料集内の久米報告を参照）の被葬者と、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の居住民との強い関連性を示していると思われます。

最後に、カナン石刃について触れておきたいと思います。テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡からは、数本のカナン石刃が出土しています。カナン石刃はウルク期から青銅器時代にかけてよくみられる特徴的な石刃です。その製作には高い技術が必要で、専業的な生産体制をもつ拠

図４　テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡出土
カナン石刃

点とそこからの流通が想定されます。テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡の交易活動を知るうえで興味深い資料と言えます（図４）。

５．集落の移り変わり

テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡に人々が住み始めたのは、紀元前３千年期初頭つまり、前期青銅器時代の初期にさかのぼると思われます。住居は、日干し煉瓦でできたものから、石膏岩を主体的に使用するものへと変化していきました。そして、紀元前３千年紀後葉、前期青銅器時代Ⅳ期に、集落は廃絶されたようです。その後は、大規模な集落としての居住はありませんでした。しかし、紀元前２千年紀つまり中期青銅紀時代に入り、土壙墓造営などの小規模な使用が開始されたようです。

６．まとめ

今回の一連の発掘調査では、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡のほんの一部を調査したに過ぎません。しかし「セム系部族社会」を考えるための、基礎的なデータを蓄積できました。まずはこれらの資料を丹念に分析・研究していく必要があります。

さらに遺跡踏査によって、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の土地利用の様相が明らかになってきています（本資料集内の門脇報告を参照）。「セム系部族社会」を探るためには、集落居住民と遊牧民を含めた人間集団の関係性について考えなくてはなりません。第３発掘区の成果は、遺跡北西部に第１、２発掘区とは異なる住居遺構が存在する可能性を示唆しています。遺跡北西部の詳細な調査を行い、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡内で、遊牧民も含めた異なる集団の存在を検証することが今後の課題です。

この調査に関連する文献

大沼克彦・長谷川敦章（2009）「農耕と牧畜のはざまに　ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落－シリア、ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の 2008 年度発掘調査—」『平成 20 年度　考古学が語る古代オリエント　第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』76 － 79 頁　西アジア考古学会。

中村俊夫・星野光雄・田中剛・吉田英一・齋藤毅・東田和弘・桂田祐介・長谷川敦章・太田友子（2009）「シリアのユーフラテス河中流域にある Tell Ghanem al-Ali 遺跡発掘資料の 14 C 年代」『セム系部族社会の形成 Newsletter』16、16-21 頁。

長谷川敦章（2008）「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査」大沼克彦編『セム系部族社会の形成 Newsletter』10 5-9 頁。

長谷川敦章（2009）「紀元前３千年紀におけるユーフラテス河中流域の集落と墓域の関連性－テル・ガーネム・アリ出土人物形土製品の検討から－」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生－西アジア考古学最前線』143 － 157 頁

同成社。
長谷川敦章（2010）「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落変遷に関する一試案 ― 第 4 次発掘調査の成果を中心に ―」『若手研究者成果論集』62 － 75 頁。
長谷川敦章・大沼克彦（2010）「農耕と牧畜のはざまに　ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落－シリア、ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の 2009 年度発掘調査―」『平成 20 年度　考古学が語る古代オリエント　第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』70 － 75 頁　西アジア考古学会。
長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦（2008）「農耕と牧畜のはざまに　ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落－シリア、ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の 2007 年度発掘調査―」『平成 19 年度　考古学が語る古代オリエント　第 15 回西アジア発掘調査報告会報告集』62-69 頁 西アジア考古学会。
Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila (2005) *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.
Hasegawa, A. (2008) Archaeological Research in the Bishri Region-Report of the Fourth Working Season-: 2.Trench excavation in Square 1 of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 29: 176-178.
Hasegawa, A. (2009a) Sondage at the Site of Tell Ghanem al-Ali. In Ohnuma et al. (eds.) *International Symposium "Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria"*, Tokyo: 7-9.
Hasegawa, A. (2009b) Archaeological Research in the Bishri Region-Report of the Seventh Working Season-: 4.Trench excavation in Square 2 of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān* 30: 210-213.
Hasegawa A. (2010) Sondage at the site of Tell Ghanem al-Ali. *Al-Rāfidān*, Special Issue, 25-35.
Kohlmeyer, K. (1984) Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116: 95-118.
Ohnuma, K. (2009a) Sondage in Square 6 of the Site of Tell Ghanem Al-Ali. In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Ninth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.
Ohnuma, K. (2009b) Sondage in Square 6 of the Site of Tell Ghanem Al-Ali. In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Tenth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.
Tsuneki, A., Hasegawa, A. and A. Sultan (2009) Sondage and Surface Research at Tell Ghanem al-Ali. In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Eighth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.

墓から迫るセム系部族社会の形成

久米　正吾
国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員

１．盗掘墓を探る

「セム系部族社会の形成」プロジェクトでは、シリア、ビシュリ山系及びユーフラテス川中流域をフィールドとして、紀元前３千年紀の「部族集団」の生業、社会、文化の解明を目指してきました。このプロジェクトの一環として、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡（本資料集内の長谷川報告を参照）直近に位置する墓地の調査を 2008 年から 2009 年にかけて実施しました。

調査地には地理的条件の異なる墓域が２つ存在しています。１つは、ビシュリ台地上に立地し、数千基規模と予想されるワディ・シャッブート墓域です。もう１つは、現在のガーネム・アル・アリ村がある平地部に立地するワディ・ダバ墓域です（図１）。いずれの墓域も盗掘被害がひどく、状態の良い副葬品や埋葬人骨を期待することはできませんでした。その反面、墓室がむき出しになった盗掘墓は、比較的容易に墓の主体部を観察することができます。そこで、この調査では主に調査地を踏査して盗掘墓の形態と分布を記録し、大規模な墓域の全体像を短期間で把握する作業を試みました。

２．群をなす墓

これまでの調査で計 151 基の墓の記録を作成しました。調査をしてまずわかったことは、複数の墓が群を構成していることです。また、１つの墓群に異なるタイプの墓が存在する例もあって、そのタイプの異なる墓の組み合わせには４通りのパターンが認めらました（墳丘［積石］墓群、石造墓室墓群、石造墓室墓＋地下式横穴墓群、地下式横穴墓群）。

これら４つの墓群は、それぞれ造営される場所にも特徴がありました。墳丘［積石］墓群（図２）や石造墓室墓群は、見通しの良いビシュリ台地上の突端部分に位置します。また、石造墓室墓＋地下式横穴墓群は、台地上ですがややビシュリ山方面に入った内陸部にあります。一方、地下式横穴墓群（図３）は平地部のワディ・ダバ墓域を中心として広がっていますが、一部、台地上のワディ斜面でも認められました。

３．墓の年代

採集した土器からは、およそ紀元前３千年紀後半の墓が大多数を占めることがわかりましたが、散発的な採集資料ですので個々の墓群内での墓の新旧関係を明らかにすることができません。けれども、出土遺物以外にも年代を調べる方法があります。墓の型式編年からのアプロー

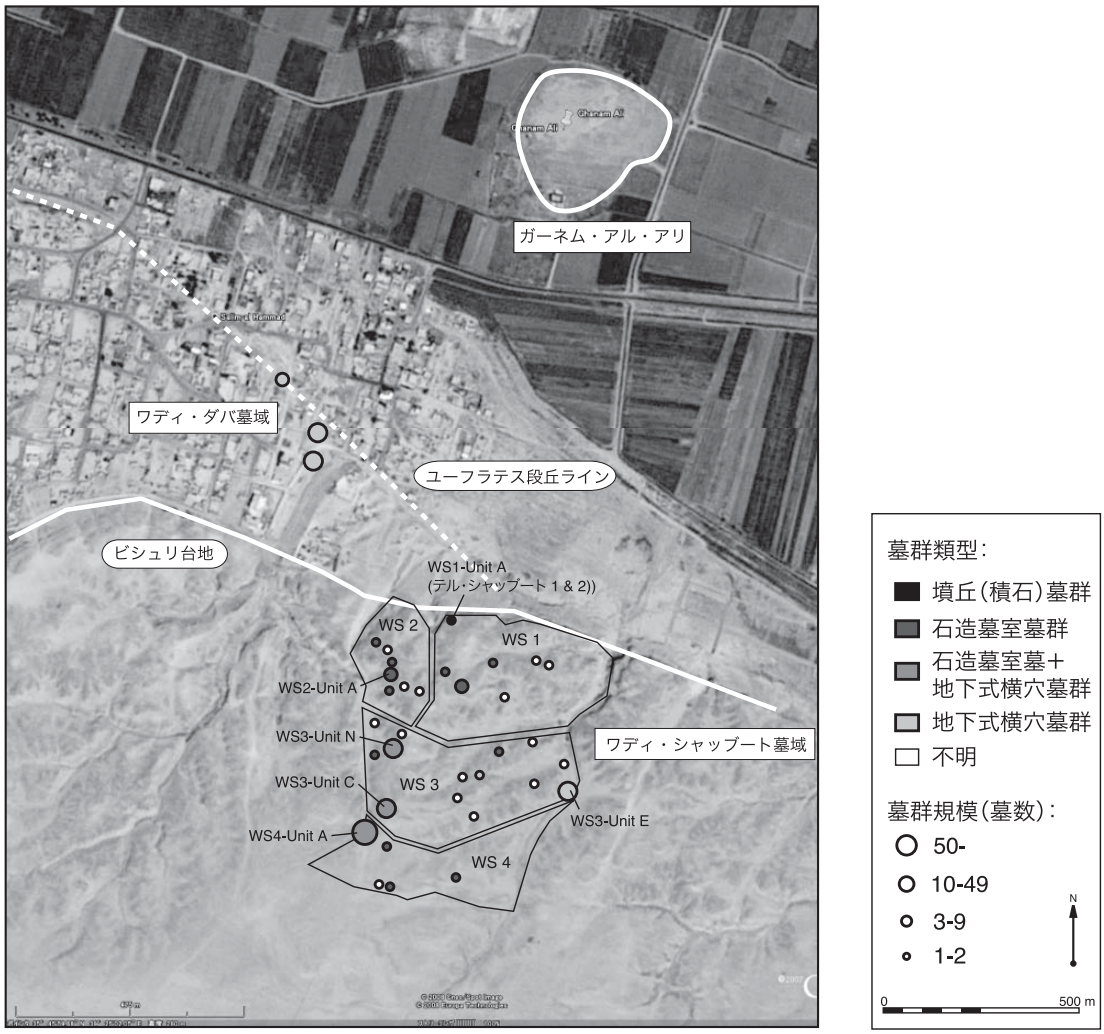

図１　調査地の位置と墓群分布

チです。ユーフラテス川流域の墓地遺跡は、今回の調査事例と同じく盗掘被害が頻繁なため、必ずしも厳密な墓の型式編年を設定するに至っていないのですが、石造墓室墓が地下式横穴墓に先行して出現することは明らかです。このため、今回記録した石造墓室墓群は、地下式横穴墓群よりも古い可能性が指摘できます。また、石造墓室墓＋地下式横穴墓群は１つの墓群を構成していますが、それぞれ時期を違えて造営されたこともあり得ることになります。

４．墓地出現の意義

今回調べた例に類似する大規模な紀元前３千年紀の墓地は、ガーネム・アル・アリ遺跡直近だけではなく、近隣の同じく紀元前３千年紀の集落遺跡（ハマディーン遺跡やムグラ・アッザギール遺跡）の直近でも見つかっています（本資料集内の門脇報告を参照）。ユーフラテス川流域において、このような大規模な墓地が遺跡の外に造られるようになったのは、実は紀元前３千年紀以降のことです。この事実は墓地を造営した集団がどのような組織であったか考える

図２　テル・シャッブート１号丘直下に発見された積石墓

図３　ワディ・シャッブート墓域の地下式横穴墓群

際に重要です。現代の民族誌を通文化的に調べた研究によれば、墓地の存在は父系出自原理やそれを通じて資産の相続を行う社会と密接に関わっていることがわかっています。現代のアラブ系「部族民」も、まさにこの「父系」や「出自」をその特質とする人々です。紀元前３千年紀以降に墓地遺跡が認められるようになってきた背景には、ユーフラテス川流域における「部族社会」の発達があったのかも知れません。

５．墓群の構造

盗掘被害のため副葬品や人骨資料を詳細に調べることができていませんから、まだ確証は得られていません。しかし、今回調べた１つ１つの墓群が、家族などの出自集団に由来すると今は考えています。このような想定はこれまでにも他遺跡の事例で指摘されてきました。問題は、墓の組み合わせパターンが異なる４種の墓群が生まれた背景です。この問題を解く鍵は、石造墓室墓と地下式横穴墓の新旧関係にあると考えています。上で述べましたように、石造墓室墓は地下式横穴墓に先行して造営された可能性がありますから、石造墓室墓群は比較的初期のガーネム・アル・アリの住人によって造営されたはずです。また、石造墓室墓＋地下式横穴墓群は、ある時間差をもって石造墓室墓群の周囲に地下式横穴墓が新たに設けられたと考えられます。この場合、実際の血縁関係があったかどうかは別にして、石造墓室墓の被葬者は地下式横穴墓の被葬者の祖先としておそらく意識されていたはずです。一方で、地下式横穴墓のみで構成される墓群の被葬者は、石造墓室墓に埋葬された人々との出自のつながりが希薄であった

図４　ワディ・ダバ墓域１号墓出土完形土器

のかも知れません。なお、墳丘［積石］墓群については孤立した存在のため、今は調べる手だてを見出し得ません。今後周辺遺跡で類例を調査していく必要があります。

６．おわりに　ー「部族社会の形成」研究に向けてー

墓を調査対象として紀元前３千年紀のユーフラテス河中流域における「部族社会の形成」を探ってきたこの試みは、まだ残念ながら未完成です。しかし、当時の「部族社会」研究を進めていく上での方向性は確実に見えてきたように思えます。それは、墓の被葬者を祖先との関係性の中で明らかにしていくことです。ただし、この研究を進めていくためには、未盗掘墓を含めた良質な埋葬データが必要となります。幸い、2009 年の秋季シーズンに、ワディ・ダバ墓域で比較的残存状態の良い地下式横穴墓が複数存在している地点を発見することができました（図４）。この地点の調査を継続して、副葬品や埋葬人骨を詳細に調べ、理化学的手法も交えながら「部族社会の形成」を実証的に解明していくことが今後の目標です。

この調査に関連する文献

久米正吾（2010）「シリア、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓地遺跡における墓群構造」佐藤宏之（編）『若手研究者成果論集』文部科学省特定領域研究総括班、1-13 頁。

久米正吾・沼本宏俊（2009a）「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』14: 11-19.

久米正吾・沼本宏俊（2009b）「ユーフラテス川流域の古代墓を探る－シリア、ビシュリ山系ワディ・シャブート墓域の第１次・２次調査（2008 年）－」日本西アジア考古学会（編）『平成 20 年度・考古学が語る古代オリエント－第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集－』日本西アジア考古学会、80-85 頁。

久米正吾・沼本宏俊（2010a）「ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査（II）」『セム系部族社会の形成 Newsletter』17: 6-13.

久米正吾･沼本宏俊（2010b）「ガーネム･アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」大沼克彦･西秋良宏（編）『紀元前３千年紀の西アジア －ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る－』六一書房、45-55 頁。

久米正吾・沼本宏俊（2010c）「ユーフラテス川流域の古代墓を探る－シリア、ビシュリ山系ガーネム・アル・アリ遺跡近郊墓域の第３次・４次調査（2009 年）－」『平成 21 年度考古学が語る古代オリエント －第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、82-88 頁。

Kondo, O. (2010) Human skeletal remains from Bishri region, excavated during 2009 seasons. *Manuscript on files at Directorate-General of Antiquities and Museums, Damascus*.

Nakamura, T. (2009) Carbon-14 dating along archaeological succession of Tell Ghanem al-Ali. M. Hoshino (eds.) Abstracts for international symposium, *Geo-environmental research in the Middle Euphrates. Nagoya University, Nagoya. November 26, 2009*. pp. 17-18.

Nakano, Y. and H. Ishida (2009) Human remains from the Bronze Age sites in Bishri region. *Abstracts for international symposium, Formation of tribal communities: integrated research in the Middle Euphrates, Syria. Ikebukuro Sunshine City, Tokyo. November 21-23, 2009*. pp. 20-21.

Numoto, H, and S. Kume (2009a) Cleaning and survey of the Early Bronze Age hilltop tombs near Tell Ghanem al-'Ali. In: K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the sixth working season. *Al-Rāfidān* 30: 172-180.

Numoto, H, and S. Kume (2009b) Archaeological survey of the Early Bronze Age off-site tombs near Tell Ghanem al-'Ali. In: K. Ohnuma and A. Sultan (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the seventh working season. *Al-Rāfidān* 30: 193-198.

Numoto, H. and S. Kume (2009c) Survey and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al'Ali. *Abstracts for international symposium, Formation of Tribal Communities: integrated research in the Middle Euphrates, Syria. November 21-23, 2009*. Ikebukuro Sunshine City, Tokyo. p. 12.

Nakano, Y. and H. Ishida (2010) Human remains from the Bronze Age sites in Bishri region, The Middle Euphrates,

Syria. In: K. Ohnuma et al. (eds.), Formation of tribal communities: integrated research in the Middle Euphrates, Syria. *Al-Rāfidān* Special Edition. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq. pp. 105-115.

Numoto, H, and S. Kume (2010a) Soundings of hilltop burial mounds near Tell Ghanem al-'Ali. In: K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the ninth working season. *Al-Rāfidān* 31: 132-136.

Numoto, H and S. Kume (2010b) Cleaning and survey of Early Bronze Age shaft graves at Wadi Daba cemetery near Tell Ghanem al-'Ali. In: K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the eleventh working season. *Al-Rāfidān* 31: 185-190.

Numoto, H. and S. Kume (2010c) Survey and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al'Ali. In: K. Ohnuma et al. (eds.), Formation of tribal communities: integrated research in the Middle Euphrates, Syria. *Al-Rāfidān* Special Edition. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq. pp. 49-60.

Tsuneki, A. (2008) A short history of Ganam al-Ali village. In: K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. *Al-Rāfidān* 29: 184-190.

セム系部族社会の景観をさぐる
－テル・ガーネム・アル＝アリ周辺の遺跡踏査－

門脇　誠二
東京大学総合研究博物館・特任助教

１．集落の外に広がる世界

ユーフラテス河中流域におけるセム系部族社会の考古学研究にとって、河川低地に位置するテル型集落とステップ台地上に分布する墓地を対象とした青銅器時代の遺跡調査が重要であることはいうまでもありません。これらの調査をさらに補強するために、ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺にどのような遺跡が残されているかを記録する調査を行っています。

現在、比較的大きな町は河川低地とステップ台地の中間地点に位置しています。この立地を活かして、河川低地では灌漑農業が営まれる一方、乾燥したステップ台地上は主にヤギ・ヒツジの放牧に利用されています。青銅器時代には農耕牧畜が十分に発達していましたので、現代と同様な土地利用が行われていた可能性は十分あります。この可能性を検討するために、ガーネム・アル＝アリ遺跡を中心とした半径 10km 程の地域を調査範囲として、遺跡踏査を 2008 年から合計 4 回行いました（図１）。

調査では、発見した遺跡の分布や年代、性格を調べることによって、（１）青銅器時代の集落が営まれるにいたった歴史的経緯をさぐること、（２）青銅器時代の土地利用を明らかにす

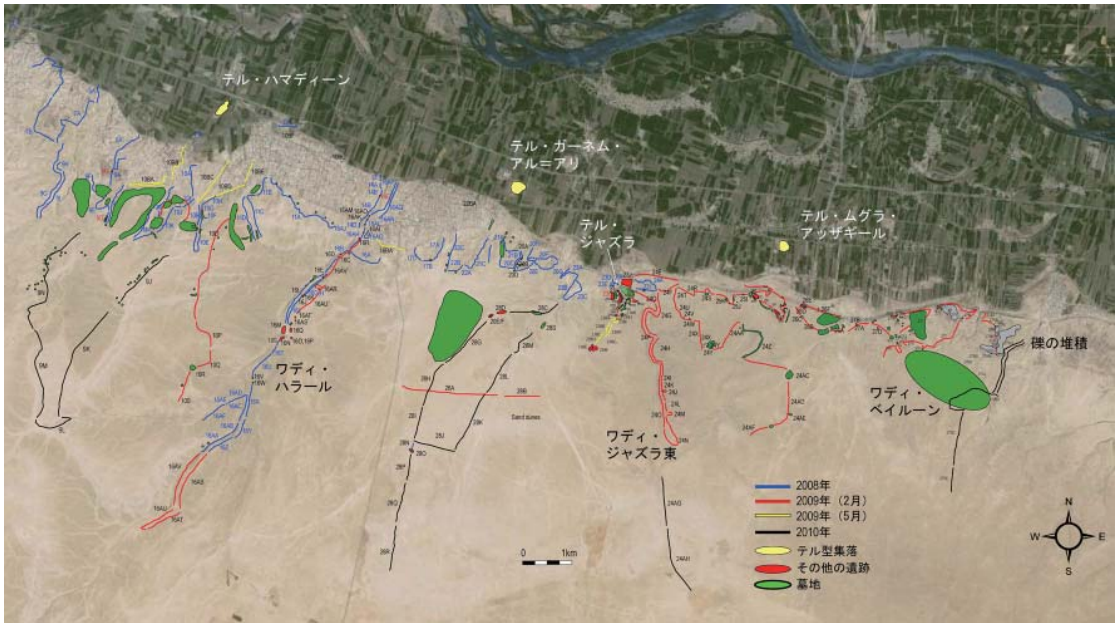

図１　テル・ガーネム・アル＝アリ周辺の踏査範囲（衛星画像は Google Earth より）。
画像内の実線は踏査の経路。番号とアルファベット（例、20A）は発見された遺跡の地点名。

ること、そして（３）青銅器時代の農耕民・牧畜民の社会関係に関する証拠を得ることの３点を目標にしています。以下、セム系部族社会の景観という話題に直接関わる２つ目と３つ目の目標の成果を述べます。

２．踏査範囲の地形と自然

調査範囲には水利の良い河川低地と乾燥したステップ台地が含まれます。ステップ台地の縁辺にはユーフラテス河の支流が幾つもあり、それに沿って形成された段丘や盆地は人間や動物にとって日陰や風除けあるいは移動ルートとして利用できる地形をつくっています。ユーフラテス河支流のほとんどは長さが数 km 以下のワディなのですが、例外として、現代のガーネム・アル＝アリ村の西を流れるワディ・ハラールは 20km 以上の長さがあります。その途中には泉がありますので今でも常に水流をたもっており、現代の年間降水量が 200mm を下回るステップ地帯の水源として貴重な地点と考えられます。

また、調査地東端の台地上には、太古のユーフラテス河（およそ 200 万年前）による堆積物が残されていて、そこには丸い礫が厚さ 10 m以上も堆積しています（図１）。重要なのは、その中に石器の材料として利用できるフリントの円礫がたくさん含まれていることです。古代のユーフラテス河が残した同様な礫層は現代のガーネム・アル＝アリ村が立地している段丘などにも残されていて、やはり石器の原石を採集することができます。

３．踏査の方法

踏査範囲には河川低地とステップ台地の両方が含まれていますが、河川低地の遺跡について他の調査隊が既に調べていますので（Kohlmeyer 1984）、私たちはステップ台地上を中心に調査を行いました。ユーフラテス河中流域のステップ台地上には青銅器時代の墓地が分布することは知られていましたが、それ以外にテル型の集落があることも報告されています（Danti and Zettller 1998）。ただ、この例はより上流部で年間降水量が多い地域です。私たちの調査地はより乾燥していますので、恒久的な居住地だけでなく、より短期に居住されたキャンプ地も発見することを目指しています。その場合、目立つ建築物などは残されておらず、地表面に散布する遺物を頼りに遺跡を発見しなくてはなりません。この様に小規模な居住痕跡の記録も行うために、徒歩による踏査を行いました。図１に示す調査範囲には、発見した遺跡の地点だけでなく、踏査した経路も図示しています。

４．青銅器時代の景観

4.1. 遺跡の種類

次に、調査の２つ目の目標である青銅器時代の土地利用に関する調査成果について述べます。土地利用を示す証拠として、幾つかの種類の遺跡が発見されました。

まず１つ目はテル型の遺跡が示す長期居住地です。これにはガーネム・アル＝アリやハマディーン、ムグラ・アッザギールといった河川低地のテル型遺跡が含まれます。しかし、ステッ

図２　テル・ジャズラ遠景（東より）。
　　ステップ台地上で発見された唯一のテル型居住地。ワディ・ジャズラ西の西岸テラス上に位置する。

図３　ステップ台地上の墓地（東から）。
　　シャフト墓が長方形盆地の縁辺に並ぶ（テル・ムグラ・アッザギールの南側）。

プ台地上のジャズラと呼ばれる地域にもテル型遺跡が存在することが発見されました（図２）。この遺跡の周辺には打製石器だけでなく、土器や磨製石器が大量に散布しています。

２つ目の遺跡類型は墓地です。ステップ台地上に青銅器時代のお墓が分布していることは、ドイツ隊などによる調査によって既に知られていましたし（Falb et al. 2005）、日本隊も現在調査を行っています。私たちの踏査では、これまで報告されていなかった場所における墓地の分布状況を記録しました（図１と３）。墓地の多くは盗掘されており、盗掘坑の近くに散布する土器片から時代鑑定をしています。

３つ目は、短期逗留地と考えられる小規模な遺跡です。遺構や土器が伴わず、打製石器のみが散布する地点が幾つも発見されました。これまで報告されたことのない種類の遺跡です。打製石器の製作技術が特徴的で、ガーネム・アル＝アリ遺跡の出土品に類似する一方、新石器時代や銅石器時代の石器技術とも異なるため、青銅器時代と考えられます（西秋 2009b）。この様な遺跡の立地には２つのパターンがあります。１つはワディのテラス上に位置する場合、２つ目は調査地東端の礫堆積に位置する場合です。後者の場合は特に、石器製作用原石を採集する活動の遺跡と考えられます。

4.2. 遺跡分布のパターン

青銅器時代の遺跡の空間分布には興味深いパターンが認められます。まず、河川低地には前期青銅器時代のテル型集落（ガーネム・アル＝アリ、ハマディーン、ムグラ・アッザギール）が数 km の等間隔で立地しています（図１）。さらに、それぞれのテルに隣接したステップ台地上にはやはり前期青銅器時代の墓地が集中して分布する傾向が認められます。テルとそれに近接する墓地が構成する３つの空間単位のあいだには、比較的大きなワディが存在し地形的な境界になっています。この様な遺跡分布のパターンは、ガーネム･アル＝アリとハマディーン、ムグラ・アッザギールに居住した集団が、それぞれの居住地近郊に墓域を設け、領域をワディなどの自然地形によって定めていた可能性を示します。

このパターンに合わない例があります。ステップ台地上のジャズラに位置するテル型集落です。その近くに墓地が密集する点は共通していますが、テルが台地上に立地する点と、他のテルとの距離関係が異なります。その理由として、この遺跡は年代がやや新しい中期青銅器時代と考えていますが、テルの居住とお墓の年代をさらに確かめる必要があります。

５．ケルン墓群

テル型集落と墓地が隣接するパターンについて上に述べましたが、その例外が発見されています。それは調査地東端のワディ・ベイルーン東岸に広がるケルン墓群です（図４）。数百基のケルン墓がおよそ南北１km、東西２km の範囲に集中しています。石膏の原石を積み上げて作られた塚は高さ２m に達するものもあります。また、長さ 50m、幅６m という細長い平面形をもつ墓には、複数の石室が直線状に配置されていると考えられます。盗掘を受けた墓の周辺に散布する土器片にはユーフラテス帯文土器、黒色帯文土器が含まれるため、このケルン墓

図４　ベイルーン地域のケルン墓群（東より）。

群もガーネム・アル＝アリなどと同じ前期青銅器時代に構築されたと思われます。これより規模は小さいですが、やはり前期青銅器時代のケルン墓の集中が、テル・ハマディーン南方の台地上にも発見されました。

これらのケルン墓群は、（１）調査範囲内における他の前期青銅器時代の墓地にあまり見られない形態であることと、（２）ケルン墓群に近接するテルが河川低地に認められないことの２点でこれまでのパターンと異なります。このケルン墓を残した人々は、河川低地のテル型集落に隣接する墓地を残した人々と異なる居住域や埋葬伝統をもった人々であると思われます。それが遊牧民であったかどうかは現在のところ推測の域をでません。

６．まとめ　ーガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の景観ー

ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺において遺跡踏査を行った結果、青銅器時代の居住痕跡が数多く残されていることが発見されました。特に、青銅器時代の遺跡には長期居住地、短期逗留地、墓地の３種が認められることが分かりました。この内、長期居住地と墓地がセットを成す空間的単位が大きなワディをはさんで数 km 間隔でならぶパターンが見られ、同時期に存在した可能性のある地域共同体の考古学的証拠として注目されます。また、このパターンに合わない例として台地上のテルや大規模なケルン墓が発見されました。これらの例外は、長期居住地の立地が通時的に変化したことや、河川低地の居住民と異なる集団が存在したことを示唆します。

この様に半径 10km という範囲内でも幾つかの異なる集団が青銅器時代に存在した可能性が認められます。これらの集団がなぜ形成され、そのあいだにどのような社会関係が形成されていたのかを明らかにしていくのが今後の課題です。

この調査に関連する文献

門脇誠二・久米正吾・西秋良宏（2008）「ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』11、3-6。

門脇誠二・久米正吾・西秋良宏（2009）「ユーフラテス河中流域の先史時代―第 1 次調査（2008）」『平成 20 年度　考古学が語る古代オリエント：第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』、57-62 頁。

門脇誠二・久米正吾・安倍雅史・仲田大人・西秋良宏（2010）「ユーフラテス河中流域の先史時代―第 2 次、第 3 次調査（2009）」『平成 21 年度　考古学が語る古代オリエント：第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』、55-61 頁。

西秋良宏（2007）「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成（2006 年度研究報告）」『セム系部族社会の研究』大沼克彦編、24-29、平成 18 年度文部科学省科学補助金特定領域研究総括班研究報告書。

西秋良宏（2007）「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」『セム系部族社会の形成：第 3 回シンポジウム平成 17-18 年度の研究成果』大沼克彦編、7-12、平成 18 年度文部科学省科学補助金特定領域研究総括班研究報告書。

西秋良宏（2009a）「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成（平成 19 年度の研究報告）」『セム系部族社会の研究』大沼克彦編：27-29、文部科学省科学補助金特定領域研究総括班研究平成 19 年度研究報告。

西秋良宏・門脇誠二・久米正吾（2008）「ユーフラテス川中流域の先史遺跡　―2008 年春季踏査報告」『オリエント』51(2)、203 頁。

西秋良宏（2009b）「ユーフラテス川中流域青銅器時代の石器製作技術」『日本西アジア考古学会　第 14 回総会・大会要旨集』、36-39。

西秋良宏・門脇誠二・久米正吾・安倍雅史（2009）「ユーフラテス川中流域の先史遺跡―第二次、第三次踏査報告」（ポスター）『日本オリエント学会第 51 回大会』、同志社大学、『オリエント』52(2)、225 頁。

Danti, M. D. and R. L. Zettller (1998) The evolution of the Tell es-Sweyhat (Syria) settlement system in the third millennium B.C. In *Natural Space, Inhabited Space in Northern Syria (10th-2nd millennium B.C.)*, edited Michel Fortin and Olivier Aurenche. TMO 28, Maison de l'Orient Méditerranéen, BCSMS 33, Québec.

Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J.-W., and Vila, E. (2005) *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.

Kohlmeyer, K. (1984) Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116, 95-118.

Nishiaki, Y. (2008) Prehistoric survey at the northern edge of Jebel Bishri, Raqqa. *Al-Rāfidān* 29, 151-152.

Nishiaki, Y., S. Kadowaki and S. Kume (2009) Archaeological survey around Tell Gahnem Al-'Ali. *Al-Rāfidān* 30, 145-153, 160-163.

Nishiaki, Y. (2009) Archaeological surveys of the Bronze Age and the earlier settlements around Tell Ghanem al-Ali. *Abstracts for International Symposium, Formation of Tribal Communities Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*, pp. 10-11. The Ancient Orient Museum, Tokyo, November 21-23, 2009.

Nishiaki, Y. (2010) Archaeological evidence of the early Bronze Age communities in the middle Euphrates steppe, north Syria. *Al-Rāfidān*, special issue 2010: 37-48.

座談会

遊牧と農耕のはざま

－セム系部族社会の構造に挑む－

話題１：埋葬者のなぞ

・台地上の墓地に埋葬されたのは誰か。

・ガーネム・アル＝アリは小さすぎる？ステップ居住民が埋葬されたのか？

話題２：セム系部族社会はどこに位置していたか

・社会の中心は集落かそれともステップか？

・集落居住民とステップ居住民は異なる部族か？

話題３：セム系部族社会とは何だったか

・ユーフラテス河中流域の青銅器時代は何が特徴か？

メ　モ

岡山市立オリエント美術館特別講演会

若手研究者が挑むセム系部族社会の形成
－ユーフラテス河中流域の青銅器時代考古学－
発表要旨集

発行日： 2010（平成 22）年 6 月 12 日
編　集： 久米正吾、須藤寛史
発　行： 岡山市立オリエント美術館
〒 700-0814　岡山市北区天神町 9 － 31